

雷神の珠

豊島与志雄

青空文庫

むかし、世の中にいろいろな神が——風の神や水の神や山の神などいろいろな神が、方々ほうぼうにたくさんいた頃のこと、ある所に一人の長ちようじや者が住んでいました。その長者が、ある日、他国から来た旅人から、次のような話を聞きました。

——雷らいの神が空から落ちると、その落ちたところに大きな穴があいて、その穴の底に、まっ白な珠たまが残る。それは世にも不思議な珠で、雷の神の宝物にちがいない。なぜなら、落ちた雷の神が黒雲に包まれて空に昇ってゆく時、黒雲はその珠をも一緒に包ん

で持っていてしまってしまふ。だから、その珠を見ようとすれば、雷の神が落ちてすぐに駆けつけなければいけない。けれども、黒雲に包まれてるうちだから、なかなか見つからない。世界中にまだ誰もよく見た者が無い。それほど珍らしい不思議な珠だ。

長者はその話を聞いて考え込みました。それから、その不思議な珠をどうにかして手に入れたいと思いました。言うまでもなく長者のところには、金や宝が蔵くらいっぱいありましたけれど、世界中に誰も見た者が無いというほど、珍らしい珠たまは一つもありませんでした。

「その不思議な珠を手にいれたいものだな。そうすれば私は世界一の長ちようじゃ者になれるわけだ」

そして長者は、いろいろ工夫くふうをこらしましたけれど、どうもうまい考えも浮かびませんでした。雷らいの神が落ちたところへ、落ちると同時に駆けつける、そんなことがなかなか出来るものではありません。雷の神はいつどこへ落ちるかわかりませんし、また、ぐずぐずしていれば珠と一緒にすぐ空へ昇っていつてしまうのです。

「これは困った」

そして幾日も考えあぐんだ末、長者はどうとうある計画を立てました。

長者の庭のまん中に、大きな高い木が一本ありました。雷の神は何でも高いものの上に落ちるのですから、その庭の木に落ちな

いとは限りません。そこで、もし雷の神がその木に落ちて、それから地面に転がり落ちたら、木の根下ねもとに大きな穴があいて、そこに不思議な珠が落ちるだろう。だから、雷の神と一緒に生捕いけどつてしまつたら、その珠も手に入れることが出来るだろう。

「そうだ、そうだ」

そこで長者は、雷の神と珠とを一緒に生捕くふうる工夫をしました。

大勢おおぜいの家来達けらいに言いつけて、丈夫じょうぶな縄なわの大きな綱をこしらえさせ、これを庭の大木のまわりに張らせ、綱につけた綱を一本引けば、綱が大木の根下にすつかりかぶさつてしまふようにしました。

「こうしておけばうまくゆくにちがない」

そして長者は、入道雲が空に出て来て雷が鳴り出す日には、庭の隅すみに飛び出して、綱の綱を握りしめ、雷らいの神が大木に落ちるのを待ち受けました。

二

ところが、長ちやうじや者がいくら待ち受けていても、雷の神は長者の庭の木に落ちませんでした。

というわけは、雷の神は空を鳴りはためきながら、どこに落ちてやろうかと見下みおろしているうちに、長者の庭の木に仕掛しかけがしてあるのを気づいてしまったのです。

「これはうかつには落ちられないぞ」

そしてますます勢い強く鳴りはためいて、長者の家の近くに何
度も落ちてみせましたが、仕掛けのしてある木には一度も落ちま
せんでした。

長者は待ちくたびれてきました。近くには何度も雷の神が落ち
るのに、自分の庭の木にだけ落ちないものですから、なおさらじ
れだしました。

「どうすれば庭の木に雷の神が落ちるだろう」

そこで長者は、何か雷の神の好きなもので招き落してやろうと
考えました。

その頃、ほど近い都に、名高い物知りものしが住んでいました。長者

はその物知りのところへ使いをやって、雷の神の好きなものをたずねさせました。

やがて、使いの者が帰って来て、都の物知りから聞いてきたところでは、雷の神はぴかぴか光った赤いものが好きだということでした。ぴかぴか光った赤いものを見せると、雷の神がすぐに落ちてくるから危ない、と物知りは言ったそうです。

「なに、危ないことはない。仕掛しかけがしてあるのだから」
けれども、そのぴかぴか光った赤いものというのは、一体何のことだろう、と長ちようじや者は考えました。

「はて……」

その時ふと思いついて、長者ははたと膝ひざを叩きました。また家け

来達らいに言いつけて、大きな日の丸の扇おうぎをこしらえさせました。畳たたみ二枚ほどもある大きな扇で、まん中に大きく金の日の丸を書いたものでした。それで雷らいの神を招き落とそうというのです。

三

さて、ある日、空にむくむくと入道雲が出てきて、それがふくれ上がり延のび広がり、やがて空一面まっ黒になって、ざあーっと大粒おおつぶの雨が降り出し、ごろごろと雷が鳴り始めた時、長者は庭すみの隅のあずまやの中に出ていきました。そして、庭の大木に仕掛けた網の綱を足でふまえ、いざといえばすぐにその綱を引つ張つ

て網を落とすようにして、それから、大きな金の日の丸の扇をあ
ずまやの軒のきから差し出して、空に向かって両手であおぎながら、
雷の神を招き落とそうとしました。

扇には油が引いてありましたから、いくら雨に濡れても平気で
した。ざーざーつと降る雨の中にも、金の日の丸はぴかぴか光り
ました。雨が少し小止こやみになって、雷が激しくなってきましたと、
ぴかりとする稲妻いなづまの蒼白あおしろい光りを受けて、濡れた金の日の丸
が、なお一層輝いてきました。

雷らいの神は空の黒雲の中からふと、金の日の丸を見つけました。

「おや」

そして自分の好きなそのぴかぴかした赤いものにひかされて、

そこへ落ちようとしかけましたが、仕掛しかけがしてあることを思い出しました。

「うっかりあすこへ落ちたら大変だ」

そう思つて、なおかんしやくを起こして、ひどく鳴りはためきました。

ちようじゃ長者の方でも一生懸命でした。金の日の丸おうぎの扇で雷の神を招き落とさなければ、とうていその不思議な珠たまを手に入れることが出来ないのです。雨に濡れるのもかまわずに、あずまやの中から飛び出して、庭の中につつ立って、金の扇で招きました。

そしてしばらく、雷の神と長者との争いが続きました。するうちに、空の黒雲の縁ふちからのぞいていた雷の神は、あまり

しつこく金の日の丸の扇で招かれるのがしやくにさわってきました。そしてまた、その金の日の丸のぴかぴかしたいろに、知らず知らずひきつけられてゆきました。しまいには、辛抱しんぼうしきれなくなつて、なかばかんしやくまぎれに、なかばうつとりして、非常な勢いで、金の日の丸めがけて、一息ひといきに落つこつてやりました。

すさまじい電光でんこうと雷鳴らいめいと黒雲との渦巻うずまいた中に、金の日の丸がぴかりと光つただけで、後は何にもわかりませんでした。

やがて、長者の家の人達が、正気しょうきづいて駆けつけてみますと、庭の中が黒こげになつていて、長者は姿も見えませんでした。

雷らいの神は、庭の高い大きな木に落ちるひまもなく、じかに金の日の丸の上に落ちかかったのです。そして、その扇おうぎを持つてた長ちようじや者は、雷の神に打たれ焼かれて、雷の神が落ちるはずみに地面に出来た大きな穴の底に、ただ黒こげの骨だけとなって横たわっていました。

それで、その時もやはり、雷の神が落ちて出来る穴の中に、雷の神と一緒に落ちるといふ不思議な白い珠たまを、誰も眼に見た者がなかつたそうです。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雷神の珠

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>